It's Not Your Fault :
ニート-引きこもり問題に対する社会学的アプローチ

- 韓国社会における「適応」に対する悠自の哲学と実践 -

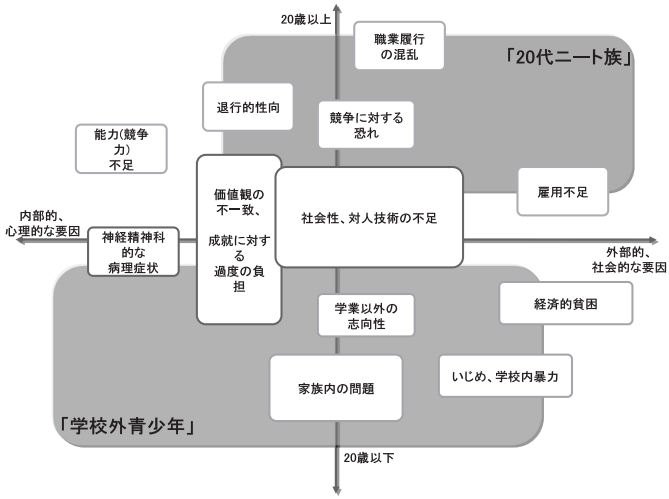
悠自サロン 유자살롱

アキ

2012.2.20.

立命館大学公開シンポジウム

「ニート-引きこもり」概念のマッピング(Mapping)



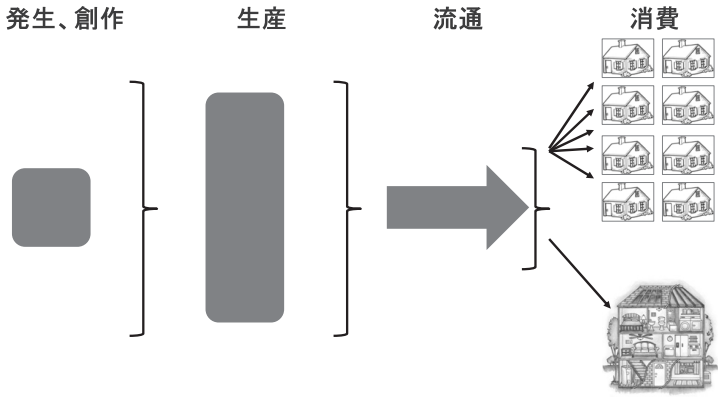
「放棄」の一般化：社会システムの崩壊

1)「無重力青少年」の概念
- 社会問題化しながらも肯定的な意味を内包
- 「ニート」と「引きこもり」へ包括的にアプローチ

2)「勤勉、誠実、努力」という支配理念の崩壊
- 朝鮮戦争後の圧縮的な成長：「努力すればよい」という支配理念
- アジア通貨危機以降「努力しても無駄な社会」の到来

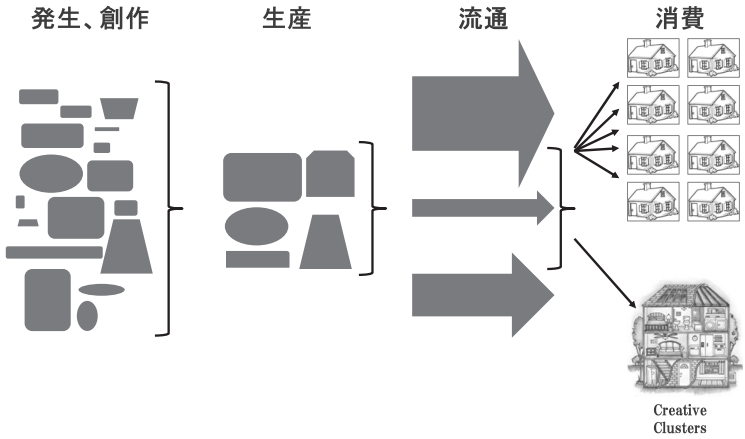
3) 経済システムー理念/社会制度との摩擦と無重力性の一般化

産業社会の経済構造

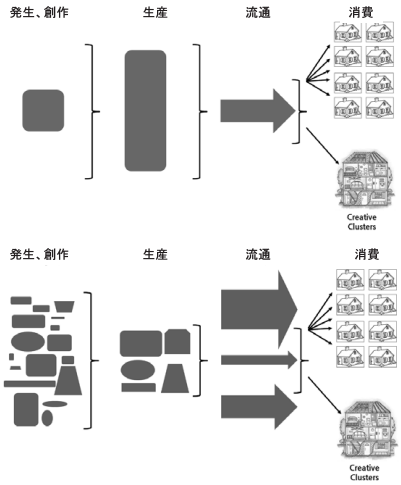


出典：Understanding the Engine of Creativity in a Creative Economy: An Interview with John Howkins
http://www.wipo.int/sme/en/documents/cr_interview_howkins.html

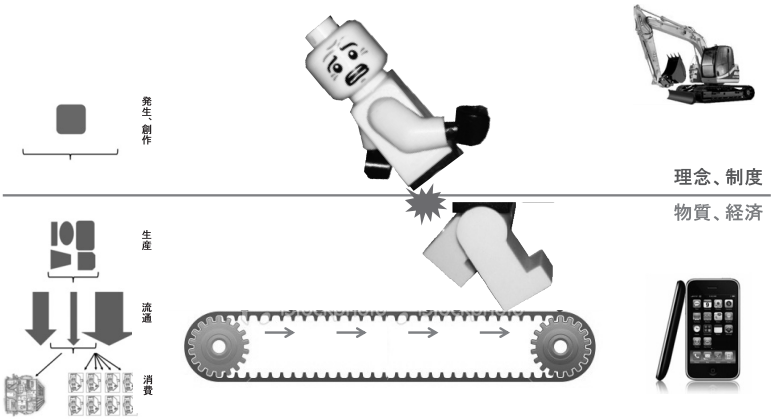
創意産業社会の経済構造



世の中は変わった･･･



…半分だけ！



無重力の問題はアトピー + アノミー

本人と周囲の人々が
苦しむという点で
病理的な現象

最近の時代的な脈絡を
反映するという点で
自然な変化傾向

「アトピーatopy　+　アノミーanomie」

アトピーのように、原因究明はできないが、
表面的な症状だけを治療する
単なる対症療法ではなく、
環境と体質を変えてこそ改善可能

不安定性と両極化の時代、
「資本主義の冬」が近づいていることを
敏感に感じている青少年たちの
アノミー的な現象

運営哲学

学校よりもコミュニティ
：教育や講義ではなく「コミュニティ」が子供たちを教え、治癒する

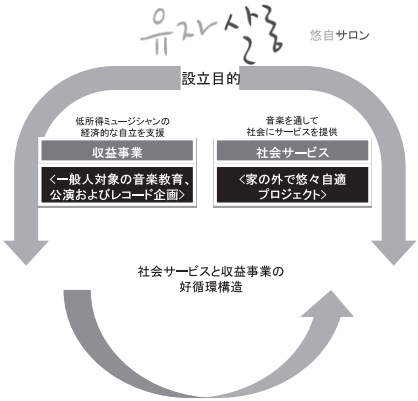
無条件の信頼
：人には何よりも信じる心が必要であり、誰もが自己治癒力を持っている

忍耐と待つこと
：いま倒れるよりは、待ってあげながら遅れて行く方がよい

Fun! Fun! Fun!
：つまらない音楽なんて数学の勉強と同じ

私達はみんな障害者
：誰にも障害（短所）がある。短所がないと思うならそれが最大の障害！

運営方式：営利と非営利のハイブリッドエンジン



互いに役立つという
相互依存の感覚

悠自サロンが計画していること

1) 家の外で悠々自適プロジェクト（再活力化）

2) 社会問題化 – 初期発見および予防システムの確立

3) 軽くて負担の少ない雇用ネットワークの構築

4) 無重力出身の「ロールモデル」の発掘

5) 韓国内における日–韓交流の拡大

ありがとうございました

悠自サロン

アキ

（akiiyooja@gmail.com）

It's Not Your Fault －ひきこもり問題に対する社会学的アプローチ －韓国社会における“適応”に対する Yooja の哲学と実践－

Akii
Yooja Salon、韓国
akiiyooja@gmail.com

1．はじめに

この度の日本訪問では 2 つの行事で発表を行うため、2 種類の原稿を書くことになりました(「全国実践交流集会」の発表原稿は行事のウェブサイトからダウンロードしてご覧になれます)。仮にこの文をお読みになって韓国のひきこもり問題に関心をお持ちになりましたら、いつでも上記のメールアドレスまでご連絡ください。私はまだ日本語を学ぶことができずにおりますが、最近はインターネットの翻訳ツールが非常に発達していて、日本語でメールを頂いても80％ほどは理解することができます。もちろん、英語の使用がご不便でなければ英語で送って頂いても構いません。この原稿は、大学で開催されるシンポジウム向けということなので、これからは少し固い表現で書いていきます。

2．ひきこもりだけではない一般的な“適応”の問題

2-1. ニートまたはひきこもりとは

韓国社会においてひきこもりに対する定義は明確ではありません。従って我々はひきこもりを論じる前に、「韓国社会においてひきこもりとは誰／何か」ということを問うてみなければなりません。「ニート(NEET)」は周知の通り“Not in Education, Employment, or Training”の略語であり、自発的な求職断念者を意味する用語と言えます。しかし韓国では、主に“ニート族”という単語を使いながら、“パラサイト族”に準ずる軽蔑的な意味で使われています。また、失業統計が発表される際には“青年失業者”の中で求職を放棄した人の類義語としても使われています。ニートという用語が徹底して“労働市場”の観点から使われているということです。一方、“ひきこもり”は“隠遁型 1 人ぼっ

ち”と翻訳され、非社会的で対人恐怖症のまま社会生活を拒否する個人を意味しています。これはひきこもり化の過程に含まれる社会問題を見過ごすことで、ひきこもり現象を個人の心理的な病理現象としてのみ見なす結果をもたらします。

ここで注目すべき点は、ニートとひきこもりの関係や社会と個人の関係について、まだ多くの人々が認識できずにいるということです。ニートという求職断念者のグループに置かれた人々が、時間が経過するにつれて心理的に次第に萎縮するようになり、やがてひきこもりに進む可能性が高い一方、ひきこもりの個人もまた、労働をしないため、自動的にニートという集団に含まれる他ありません。しかし、韓国ではニートを“集団的－雇用／労働の問題”、“ひきこもりを個人的－精神的問題”としか見ていないため、これらの間の複雑な関係を解き明かすことができないのです。

また、世界的に“youth”と呼ばれる対象が、韓国では青少年(15 歳～ 24 歳)と青年(大体 18 歳～ 29 歳または 25 歳～ 30 代中盤)とに分かれている点も注目に値するでしょう。ソウル市を例に挙げると、地方自治団体に“児童青少年課”はあっても“青年課”は存在していません。25 歳以上、または一般的に大学に進学した 20 歳以上の青年は政策の対象でさえないというわけです。10 代は学校に通わなければならない存在、20 代は(大学の学費支援を除いては)全てのことを自らやらなくてはならないという二分法が、やはり 20 代の人々にとっては負担に感じるようです。

2-2. 何が問題なのか

しかし何よりも重要なことは、誰もがこのニート－ひきこもり現象を社会問題として認識できずにいることです。それは単に問題が少ないとか無いからではなく、彼らが社会的に“非可視化”されているからです。韓国において学校を離脱し、フリースクールにも通わず何もしないということは、“最も駄目な人間”になることを意味しています。大部分の親はこのような状況を恥ずかしく思い、自分自身の過ちと認識するため、親戚にすら子どもたちの状況を知らせずにいます。従って周囲に助けを求めることや、政策的な問題提起を行うことはほとんどありません。中産層の場合、私設の心理相談所や神経精神科に通

うこともあるが、大部分が心理的、精神科的な問題ではなく“態度の問題”だと考えながら相談や治療を自ら中断するケースが多くあります。低所得層の場合、公的支援を受けられる精神保健センターなどに通うこともありますが、無料で支援を受けられる回数が決められており、やはり持続的な支援を受けられません。

後にもう１度論じますが、ニート－ひきこもりに対する社会の否定的な見方、学習と労働を絶対的なものと考える社会的な体系は、彼らにとって高い障壁として作用しています。辛うじて心理状態を引き上げ、外部活動を徐々に始めようとしても、「学校に通ったり訓練を受けたり仕事をするのは当然だ」と考える社会は、彼らにとって敵対的なものに感じられる他はありません。20 代のニートの場合、労働以外の領域ではなんとか過ごせたとしても、労働領域に入れば高いストレス指数のためにその状況を避けて離れるようになるケースが多くあります。このようにして社会復帰が根元から封鎖され、ひきこもりの固定化、または再ひきこもり化が起こるのです。

2-3. 無重力青少年――“It's not your fault”からの出発

このような苦悩の中で、Yooja Salon では彼らをニートやひきこもりのような限定的で軽蔑的な言葉で呼ばせないために、もう少し中立的な表現である“無重力青少年”という単語を作り出しました。社会的な現象（無重力化傾向）を問題化しながらも、対象（青少年たち）に顔のないグループの一員としての烙印を押さないために、「誰もが人生のある瞬間に無重力状態に陥る可能性がある」という意味を含め、この表現を用いているのです[23]。こうした新しい概念を用いるのは、ニート－ひきこもりの問題意識を一般的な“適応”問題へと拡張する上でも効果的です。

多くの無重力青少年たちは、現状が自分の過ちから始まったと考える場合が多いです。しかし、我々全員が知っているように、無重力化の過程には社会的な衝撃や摩擦、家庭内の持続的なストレス、本人内部の性向など、いろいろな要素が存在します。「私の過ち」と考えるのは本質を十分に把握できていない

[23] この文でも今後は、ニート－ひきこもりの代わりに無重力青少年という単語を用いることにする。

ばかりか、変化の可能性を低めます。従って、まずは個人の過ちではなく、社会的な力学(dynamics)の中で起こった事件であるという事実を認識することが重要です。Yooja Salon のスローガンである“It's not your fault”はこうした問題意識から生まれました。

3.「放棄」の一般化は社会システムの崩壊を示すもの

3-1. 韓国において無重力青少年は“アイデンティティの闘い”

上で少々長々とニート、ひきこもり、無重力青少年の定義について扱った理由は、韓国社会では未だに無重力青少年の問題が“少数者アイデンティティの問題”であるためです。ここには、女性、黒人、ゲイなど少数者集団の権利闘争の歴史と多くの共通点が存在します。初期状況である現在は彼らに対する公的談論自体が存在せず、そこには、怠けている、病的である、迷惑をかけるなどといったあらゆる種類の個人的な偏見が居座っています。しかし、彼らが社会の中で基礎的な権利を見出すようになれば、差異よりも共通点をより多く発見するでしょうし、いわゆる“一般人”と同じか、さらに優れた成果を挙げるケースもかなり多いのではないかと確信しています。そして、社会が容認する“多様性”の範疇内に編入され、多くの問題が解決される様相を見せるでしょう。

もちろん無重力青少年は社会的な葛藤自体を望まない傾向が強いため、他の少数集団の闘争過程のように問題がうまく解決される可能性は高くありません。しかし、無重力青少年という集団の持つ内的、外的な共通点が存在するため、充分に“社会問題”に発展させることができるでしょう。我々ができることは、今から多くの準備をして、偏見よりも真実がさらに明らかになるように支援することだと考えています。

では、無重力性は個人的な性向なのか、社会的な問題なのか。結論から言うと、無重力の問題は、個人的であると同時に社会的であり、絶対的でありながらも相対的です。一般の人々は彼らが絶対的な孤独に落ちこんでいると錯覚し、自分自身との比較によって彼らを排除したりします。

しかし我々は、無重力青少年の孤独が相対的で一時的なこと、そして非常にありふれていることだと信じているため、一般の人たちのそれと大きく異なるものではないと考えています。一方で、彼らがまさに今抱えている困難は絶対

的であり、それは(Yooja Salon のスタッフを含めた)誰にも客観的に測定できません。

3-2. 韓国の労働観念と「勤勉、誠実、努力」という支配理念の崩壊

二神能基さんの韓国版書籍の題名でもある「働かない人々、働けない人々」は、ニートの状態を端的に表した言葉だと思います。無重力青少年の場合は学業が“仕事”と同じであるため、やはり労働を取り巻く社会的環境に対する考察は非常に重要です。

朝鮮戦争以降の近代産業化の過程で、韓国社会は表面的には“努力”という勤勉•誠実な“態度”を最も重要なものと見なしてきました。「一生懸命にやっているならうまく出来なくともよい」という考え方です。これは韓国人のメンタリティに深く刻まれた支配理念と言えるでしょう。西欧の場合には、過程も重視するものの成果についても一定して強調してきたため、相対的に努力や根性よりは才能や適性を重要と考えられます。これは、清教徒的な「召命(calling)」に従って、自身の職業が本当に自分に合っているかどうかを確認しようとした資本主義的な職業観と、「何をするかは重要ではなく、熱心に努力して科挙(現在の高等文官試験)に受かり、昇進すれば全てが解決する」という韓国的な職業観との違いとしても現れています。

実際に、朝鮮戦争後 40 年間は社会の全ての部門で高い成長率を見せました。そのため、その“努力する態度”だけを持てば、大部分の人が継続してよりよい“結果”を作り出せる可能性が非常に高かったのです。このような側面では、そうした支配理念がある程度、純粋に機能を果たしたと見ることもできます。しかし、1997 年のアジア通貨危機を迎えるとともに韓国の成長率は急激に低下しはじめ、同時に以前よりも遥かにひどい両極化が進みました。グローバル化と共に急速に発展した大企業と一部の産業部門(金融、電子など)の勤労者を除く一般の市民たちは、低い成長率と高い物価・住居費・私教育費のため、実質所得の面でマイナス成長をしていると感じています。結果的には、熱心に仕事をしようがしまいが結局は大部分が没落する社会において、努力する態度などはもはや重要ではなくなり、俗物的な“結果(成果)”中心主義が支配的な理念として位置づけられるようになったのです。

「どんなふうにやってもいいから、結果がよくないといけない」という、以前には社会の裏面だけに居座っていた価値が、「言われた通りに熱心に努力すればいい」という価値よりも前面に出てくるようになり、二重の価値が持つ矛盾が如実に現れるようになりました。また、どんなによくやっても以前の時代／世代の成果を超えることができない“低成長の時代”が到来するにつれ、成果に対する若い世代のストレスはますます甚だしいものとなりました。そのため、成果に対して初めから怖気づき、端から“努力”という態度自体を持たない青少年が出てきたのです。

ところで問題は、従来の世代が両極化や俗物的な結果主義を改善しようとしないまま、若い世代の“努力しないこと”だけを非難していることです。従来の世代は事実、高度成長の時代を生きながら、努力以外にも様々な方式で正常な成果以上の成果を挙げてきました。家庭を破綻させるほどの仕事中毒から始まり、学縁と地縁を活用した各種の請託や非道、租税逋脱など、“勤勉と誠実”とはほど遠い方式で成果を挙げながら、自身が勤勉誠実であったと正当化する場合が多くありました。

若い世代の立場から見れば、従来の世代は、努力すればそれに見合う成果を得られる社会に生きていたので熱心に努力をしていたのです。ところが、その過程において社会経済制度の基礎を粗雑に築き、努力しても成果を得がたい社会を作っておきながら、「お前はどうして努力すらしないのか、俺は努力して今の地位を勝ちとった」と言ってむしろ腹を立てるので、若い世代としては理解できない指摘でしょう。

3-3. 経済システム――理念との摩擦と“無重力性”の一般化傾向

以上に付け加えて、産業化段階の移行に伴う労働の性格の変化についても指摘しなければなりません。画一化された教育・選抜・昇進システムの下で制限された競争をしてきた韓国の社会システムは、産業主義の社会においてのみ効果を発揮したにすぎません。生産ではなく消費に重心が移り、消費者の多様なニーズに素早く流動的に対応しなければならない現在の経済システムは、画一的で従順な労働の性格を、自律的で創造的な方向に変化させようとする傾向を見せるのです。しかし、韓国の教育・選抜制度は、既得権層が所有している富

の相続と直結しているため、ほとんど変化していません。結局、下部構造(経済システム)は前に進んでいきますが、上部構造(制度と理念)は元の場所に留まっているため、この時代を生きていく青少年や青年たちは、まるで日本のホラー映画に出てくる幽霊のように“腰が後ろにそっくり返った”状況に置かれているのです。

従って、我々が語っている“無重力状態”、即ち私を引き寄せる人も準拠集団も魅力的な仕事に就けない状況は、20代、30代の青年たちに与えられた非常に一般的な状況に見えます。産業化時代的な労働をしている一部の人達を除き、大部分のサラリーマンはやはりこうした無重力性をある程度持っており、そのために苦しむ状況が多く目撃されるようになりました。最近、韓国の国営放送(KBS)のあるコメディ番組では、「成功しようとするなら手段や方法を選んではならず、普通の人は、脇目も振らずに仕事をしても貧しく惨めに暮らす」という図式のコメディをシリーズで放映し、非常に人気を集めているが、社会のシステムがきちんと機能していないという共感帯が広く形成されていることを示す1つの例と言えるでしょう。

上記で説明したように、今や社会全体が人と人との間の引力、そして個人と仕事との関係についてもう1度苦悩しなければならない時期に来ています。今後も、全世界的な新自由主義化によって成果中心主義的な思考や経済社会的な両極化が深化し、階級下落に対する不安が深まるでしょう。また、“結果”が重要とされる傾向の中で、負担を感じ放棄する個人たちが“人生という過程”全体を失うようになる可能性が高いためです。

4．Yooja Salonの教育哲学と運営方式

Yooja Salonは社会的な現実に対する上記のような観察を基に、無重力青少年のケア事業に対する幾つかの原則と哲学を持っています。

4-1. アプローチの方式と哲学

まず、“無重力状態”は心の問題であると同時に労働の問題です。無重力化の原因は、単なる失業や自主退学だけでなく、競争社会の圧迫感から生まれる無力感であるためです。無重力青少年は、社会生活に対する負担感のために、

社会復帰する上で困難を経験します。彼らは労働市場だけではなく社会システムから排除され、孤立しているも同然です。従って Yooja Salon では、最終的な目標を単なる学校や職場に復帰させることではなく、心の問題の解決と考えています。

無重力状態を病理的な状態と見るべきかについて、我々は二重の基準を持っています。本人と周囲の人々が苦しむという点では病理的な現象と見なければなりませんが、最近の時代的脈絡を反映している点では、自然な変化傾向と考えています。社会が核心的な価値基準を失うとき、「アノミー(anomie)」状態になるが、不安定性と両極化の時代、「資本主義の冬」が近づいていることを敏感に感じる青少年たちは、こうしたアノミー状況に陥りやすくなります。

また、無重力化は「アトピー(atopy)」と似ていると言えるでしょう。原因究明はできないが、表面的な症状だけを治療する単なる対症療法だけでは治療ができず、体質と環境自体を変えてこそ改善が可能であるからです。また、完治を願わず、生活が不便でない程度を維持しながら、継続して気にかけなければならないことも類似点と言えるでしょう。このような背景の中で Yooja Salon は、①無条件の信頼、②学校よりもコミュニティが重要、③忍耐と待つこと、④ Fun! Fun! Fun!、⑤私達はみんな障害者、という 5 つの哲学を持っています。我々は全てどこかが不足している人々であり、忍耐をもって互いを信頼するコミュニティが実現されるとき、こうした訳の分からない疾患は遥かに減少することでしょう。

4-2. 運営方式――営利と非営利のハイブリッドエンジン

「家の外で悠々自適プロジェクト」は、基本的に一般の音楽教室レベルの受講料を支払う有料プログラムです[24]。このように有料で行うことや、Yooja Salon が非営利財団ではなく社会的企業の形態をとっている理由は、未だに問題の核心を理解できずにいる政府機関や企業の後援金を受けるようになると、彼らの基準に合わせてプログラムを運営するしかなくなるためです。しかし今後、Yooja Salon の活動が社会的な関心を引き出し、一般の人々の理解水準が

[24] 低所得層の無重力青少年が受講する場合には、Yooja Salon の後援組織である「ソテジマニア・ギビングサークル」からの後援金によって受講料免除の恩恵を提供している。

高まれば、企業の後援や政府との連携プログラムを積極的に進めていく計画です。また、事実上「家の外で悠々自適プロジェクト」から発生する収益が充分ではないため、Yooja Salon は、音楽と関連する教育事業やコンテンツ事業を自ら行っています。単にお金を儲けることが重要というよりは、「他人のためにも仕事をするが、自分が楽しめる仕事をする」というモットーに応えるために、各自にとって楽しみながらお金にもなる仕事を探し、行っています。

営利と非営利のハイブリッドエンジンを備えるという原則は、無重力青少年を我々がケアしなければならない対象と見ると同時に、収益創出の糸口を提供してくれる肯定的存在とも考えていることを意味します。まだ無重力青少年たちが直接的に収益を創出しているわけではないが、今も彼らの音楽や UCC 映像などが Yooja Salon の事業に間接的な経済的価値を生産していることは事実です。また、彼らを教えるために作った教育プログラムや原理が、サラリーマンを対象とする有料音楽教育プログラムでも非常に有用です。例えば、「サラリーマン芸術大学」という名の講義は、無重力状態に陥る可能性のあるサラリーマンに人生の意味や適正な重力場を取り戻させる役割を果たしています。このように、無重力青少年のためのプログラムが、単に“ケア事業”に留まらず、新しい価値を創出していくというビジョンが次第に明確になるにつれ、無重力青少年たちは自分自身に長所があるという事実に気づき、自らの価値をもっと高く評価するようになるでしょう。

5．具体的な実践方法――Yooja Salon が実行／計画中の社会的行動

Yooja Salon が無重力の問題に介入する最初の段階が無重力青少年のエネルギーの回復を助ける「家の外で悠々自適プロジェクト」であるならば、2 番目の段階は、この問題を広く伝播することで社会問題にすることです。これまでは大学生対象の講演などによって無重力の問題を伝播してきましたが、今後はより積極的に中等教育機関と連携し、親や教員の行動指針を流布していく計画です。親や教員が無重力性に対する感受性を備えるようになり、「早期発見システム」が確立されれば、より多くの青少年が無重力状態に陥ることを予防できるでしょう。

来年に計画中の第 3 段階の事業は、無重力青少年の社会復帰のための「軽い

雇用ネットワーク」を構築することです。社会的な問題に対する理解度が高い社会的企業や、コミュニティを基盤とするインターネットカフェなど、無重力状態から抜け出したばかりの青少年を雇用してもらえる事業所を探し、彼らをパートタイムで就業させることが１次的な目標であり、これにより社会には信じるに足る大人たちが多くいるという事実に気づかせようとするものです。このような段階を踏みながら一部の青少年が社会の中にうまく復帰できれば、彼らの姿が社会的偏見を緩和し、無重力青少年の社会復帰をもう少し円滑にしてくれるのではないかと期待しています。

もちろん、このような雄大な仕事をしていくためは Yooja Salon は余りにも小さく、学ぶべきことが多い。「家の外で悠々自適プロジェクト」の基礎コースで人生のエネルギーを取り戻そうとする無重力青少年のケアに関しては、継続して内部に集中し信念を貫いていかねばならないでしょう。しかし、無重力状態から脱した青少年たちの未来に関連することについては、交流と協力に対し完全に開放的な態度を持とうと思っています。このような努力に対し、韓国内のみならず日本の多くの方々とも協力していけることを心から期待しています。